

【学校向け・地域向け】【協力・実践形態：長期・単発】【本会ホームページへの掲載：あり・なし】

管理職研修 「視覚障がい者の立場から」

木山鳥 文玄佳

【推進員認定期】第2期

【所属】埼玉県視力障がい者福祉協会（視覚障がい者） 【活動エリア】桶川市を中心に埼玉県域

学習対象者	小学生（ 年生 ） 中学生 高校生 住民 その他（国土交通省 管理職）
内 容	障がい理解（車いす体験、アイマスク体験、障がい者と交流、施設体験、 <u>その他（講話）</u> ） 高齢者理解（高齢者疑似体験、高齢者と交流、施設体験、その他（ ）） その他の理解（ ）
所用時間	1回あたりの時数：2時間、 毎年1回
ねらい	・駅のバリアフリー化は、障がい者の生命に関わる重要な課題だと気づく。 ・国交省管理職として、当事者の立場を聞くことで、バリアフリー化の改善を進める必要があることに気づき、行動に移す。

はじめに

私は、40年間勤めた郵便局を定年退職する2年前の平成5年に失明した。国交省（当時の建設省）主催研修の講師を依頼されたきっかけは、目が見えなくなって間もなく水道工事の穴に落ち、怪我をし治療中に、業者の社長に対して「『私がどうして落ちたか、目の見えない人の立場で考えてほしい』との思いを社員に伝えたい」と訴えた。その後、国交省に話がいき、「下請け300社の研修会で話をしてほしい」と要請があったのが始まりである。その後、県主催のバリアフリーまちづくり担当者研修の講師、国交省から任命された「交通アドバイザー」として管理職向け研修の講師につながった。

実践内容

国交省管理職向け（全国の10の運輸局の課長補佐クラス、5名ずつ計50名）

5日間の研修の1コマを依頼されたもの。他の研修内容は福祉に関係のない行政施策に関連する内容

【講話】

目が見えないってどういうこと？ お手伝いの仕方や配慮のポイント

駅でのバリアフリーのポイント（行政等に改善してほしいこと）

・「点字ブロックの上によって立ち話をしないでほしい」とのホームアナウンスが必要

・エレベータ入口にも音声ガイドを 現状は健常者の混雑対応に利用されているにすぎない。目が見えないと場所が分からない。

ここがポイント！

- (1) 楽しみながら学ぶ「子ども向けの実践」と違い、「大人向けの実践」では、「やってほしい」との一方的なお願いでなく、「やってみたい(心の自立)」と思えるような講話の持っていく方を心がけた。
この研修では、施策の課題に気づき、改善につなげてもらえるような具体的な話を心がけた。
(駅で体験した自分の経験話など)
- (2) 障がい者自身も受け身や怪訝な態度でなく、自立することや感謝の気持ちが大切である。研修後にある受講者から「駅で手伝いの声かけをしたら断られた」「トイレ介助の仕方がなっていない」などの苦情を言われたが、どうしてよいかとの相談を持ちかけられたとのこと。障がい者も行政もお互い50/50の関係が大切。

成果と課題

【成果】

駅の物理的・人的バリアが少しずつ改善されていると感じる。この研修の直接的な効果ではないが、このような全国での積み重ねがバリアフリー化につながっていると思う。(建物だけでなく、駅員の適切な対応など)

行政や駅員も大変な中取り組んでくれていると、私自身が痛感することができた。

【課題】

今年度は講師依頼が来ないので、また依頼されるように、自分自身がもっと勉強して福祉教育の実践を積み重ね、分かりやすく伝えられる力をみがく必要があると思う。

